唯、城の崎川のゆるやかな流と、來日嶽の雲の姿とは昔に變らない。朝、立つて來る時、白い霧の一面に山からかゝつて來て、その上に朝日のぼんやりと匂つたのを見たが、それは海と山との間でなければ見られないやうな美しい朝霧であつた。

トンネルはトンネルに續いた。

湖山池の碧い水の上遙かに、鷲峯山の聳えてゐるさまは、水彩畫に似てゐて美しかつた。空氣が澄んで、山の襞が分明と影を成して見えてゐる。海に接した方には、大きな赤い砂濱が在つて、日本海の波が遠く打寄せてゐる微かな音がする。

七

四國地方に旅をしやうと思つてゐたのが、急に此方に來ることになつた心持などを考へて見る。人間のことはわかつてゐるやうでわからないものだなどと沁々思ふ。これから行きあたりばつたりに、自由な旅をして見るつもりである。

兎に角松江までは行つて見やう。美保ケ關も行つて見やう。それから先は汽船で外海をぐるりと下ノ關まで行つて見やうかなどと思つてゐる。石見にはまだ足を踏み入れないから、陸路を行つて見やうかなどとも思つて見る。

旅でのんきに世を離れて暮らすのも好いが、何うも矢張さびしすぎる。さうかと言つて、多勢して行くのも面倒臭い方の性質だから、矢張かうして行くより他に仕方がない。今年は五月頃千島

の方へ是非行かうなどと思つてゐたのだが、矢張足が暖い方に向いて來た。かう書いてゐる中にも汽車は絶えず走つて行つてゐる。車窓から入る風に、原稿は一枚離れて隣の客の膝の上に飛んで行つた。

ある小説の中から

かれを不安ならしめるものは、他ではなかつた。本能の底から來る耻辱を知らない力強いかれの感覺そのものであつた。かれは破船した舟か何ぞのやうに惡魔と神との間を絶えず往來してゐた。

惡魔ももう彼の味方ではなかつた。神もまだその顔を此方に向けなかつた。何方に行つても、かれは引返して來なければならなかつた。『何故、本能の底の聲に我々は從ふことが出來ないのか。何故それに向つて深く墮ちて行くことは出來ないのか』一方ではかう叫ぶと共に、一方では『憐れなる汝弱きものよ、本能に從はなければならないやうな弱きものよ。上を仰げ！其處には扉が汝の前に開かれやうとしてゐるではないか』と叫んで、絶えず其方へと心を向けてゐた。神祕な扉がかれの前に固く閉ぢられてゐた。

感激して、頰を涙が傳つてゐるやうな時に突然起つて來る汚れた不潔な不思議な奇蹟――それは火花の散るやうに、潮の横溢するやうに、自制力をも逞性をも何をも彼をも破壞して、そして驀

然に突進して來た。何うすることも出來ないやうなものであつた。

青い、紅い、黄い火がかれの體を燃し盡すやうに見えた。

と思ふと、時には自己の内性に反抗して、自から荒々しく心に叫ぶことなどもあつた。『恐ろしいことだ。汝は既に快樂にのみ向つてその勢力を浪費したではないか。さうだ……單に快樂にのみ……Flesh にのみ進んで行つたではないか。汝はあらゆる罪惡にもあらゆる不潔な行爲にも、快樂といふものを中心にして、そして進んで行くことを悔ゐなかつたではないか。その報酬は今、汝の醫すべからざる苦惱になつてゐるではないか。疲勞、倦怠――さういふものを更に汝は得やうとしてゐるのか』

かれの心は浮んだり沈んだりした。『實行の背景を成してゐるものが、何故かう悔恨とか空虛とかいふものになつてゐるのであらうか。實行は實行そのものだけで、何故その責任を完うすることが出來ないのだらうか』

『永久に理解すべからざるものは内部の恐怖である。我々の間に互に見えずに横つて、そして繋がつてゐる恐怖である。その恐怖で、我々は毎日生きて行つてゐる。そしてその不可思議はいかなる哲學にも書いてない』かれの讀んだ本の中に、さういふ言葉を發見して、かれは青鉛筆で、アンダーラインを引いた。『内部の恐怖、さうだ、互に見えざる、しかし離れざる恐怖だ』

かれは人間の感覺の中に解剖されずに永久に殘つてゐる不可思

議を想像した。

かれは入つて行つた。

それは短かい間であつた。一方には長い塀がつゞいて、其の中に、古い建物が屋根と屋根の破風造とを半分ほど見せてゐた。古い鐘が其處にかゝつてゐた。

入り口の處には門があつた。そこを入ると、丸い窓が見え、カテンが見え、夕日のさしてゐたのが見えた。

『寺かしら……』かれはかう考へた。かれは入口に入らうとして躊躇した。それは其處に一人の人間がやつて來たからであつた。それはまた若い尼さんであつた。頬のあたりには若い血が漲つて

ゐた。頭から足元まで大きなベールで包まれてあつた。で、その尼さんは神壇に添つて靜かに歩いて、中央のところに行つて立留つて、床の上に體を投げて、烈しいエクスタシーに陷つたやうに長い間そこから身をも起さなかつた。あたりはしんとしてゐた。夕日は靜かに右の丸窓から線を成して一面に入り込んでゐた。

かれは少くとも十分ほど其處に立盡した。神に跪く若い尼さんの祈禱は、かれの心に言ふに言はれない感激を與へた。『この心を何故私達は尊敬することが出來ないのか。何故私達はこの心の中に神を認めることが出來ないのか。私は長い間、それを無智と形式とに歸して冷笑した。僧侶達の行爲は、唯長い習慣の間に成立つた形式に過ぎないと思つて罵倒した。しかし、智は人間に何物

をもたらして來たか？　形式の破壞は人間にどれだけの自由を與へたか。……無智と智と……この不可思議な世界に、何が無智で何が智であらうか。』

かれは哲學や藝術にあらはれた多くのシーンを眼前の小さな光景に比べて考へずにはゐられなかつた。

やがて若い尼さんは立上つた。靜かに神壇の方へと歩いて行つた。白いベールは靜かに暗い寺院の空氣の奥の方へ動いて、そして見えなくなつて行つた。

かれは長い間立盡してゐた。

敎會堂で過した二三日の後には、かれには恐ろしい反動が來て

ゐた。祈禱に打込んだ心の底には、本能から來る恐ろしい衝動が凄じく渦を卷いてゐた。

其處にも此處にも、その女が見えた。自分の家の中でも、寺院の中でも、街頭でも、街道にある窓の傍でも……。その力强い引力はかれの全身に燃えわたつた。

蒸暑い天氣が一層それを堪へ難くした。空は暑い日の光で滿たされ、神經は萎へてはなれ〳〵になり、意志は際限なく弱められ、無數のわるい考が體の骨といふ骨に蝕ひ込んで來た。

かれは毎日日の暮れて行くのを恐れた。

夜――其處にははなやかな灯のかゞやきがあつた。八時頃から路にあるカツフエといふカツフエは皆な活々として蘇へつて來て

ゐた。そこには酒と女と肉とがあつた。唄と舞踊とがあつた。あらゆる誘惑――あらゆる惡德――あらゆる耽溺――人の魂をも亡させなければ止まないやうな妖艶な色彩――そこにはかれの Florence がゐた。黑い瞳をした、長い髪をした、男の體を自分の餌にしなければ置かないといふやうな抱擁の力を持つた女――。

かれは小さな書齋にゐた。日の暮れて行く頃が殊に堪へ難かつた。地平線の色はもう暗くなつた。それは暗い中に微かな光を雜へたやうな暗さであつた。屋根の光や、塔や、樹木の梢などが其處から見えた。明るい灯もチラ〳〵した。

薄暗い空氣の中の寂寞！　それは容易に堪へられないやうなものであつた。やさしい笑顏、白い肌、唇の爛れるやうな濃い烈しい

酒、かれは今まで何遍この夕暮の寂寞に堪へかねて、明い灯を望んで急いで町の方へ向つて走つて出て行つたらう。書齋の扉を後に、階梯を下りて行く自分の足音はいかに快活に響いたであらう。地獄の暗い穴の中から出て行くやうにしてかれは出て行つた。

かれは耳の痛みを感じた。輕い快よい痛みだ。女はよくかれの耳を嚙んだ。呪ふべき愛すべきわが Florence よ。

かれはその感覺の力の強さを何うすることも出來なかつた。それほどその引力は烈しい複雜した力を持つてゐた。其處にも彼處にも其の面影が漂つて生々として動いてゐた。振り拂つても振り拂つても矢張かれの身の周圍を離れなかつた。

かれは猶その慾望を押へた、終には絶望して、せめてさういふところから遁れやうとした。かれは町から町へと歩いた。暗い巷路のやうなところをも歩いた。疲勞――それがかれを救けて呉れるだらうと思つて、體が綿のやうになるまで歩いた。しかし、矢張駄目だつた。闇の中にも、灯の中にも、かれの讀む夕刊の字の中にもその女がゐた。かれは終にはその女がゐる家の方へ足を向けて行つた。階梯を上つて、扉を明けて入つて行つた。

その翌朝、かれは何んなに悔いて、何んなに疲れてそしてまた何んな憎悪と何んな悔恨と何んな絶望とを抱いて、その階梯を下つて來たであらうか。かれは涙を流してゐることさへあつた。

一のものから二のものに移らうとして、かれは悶えた。感覺を離れ〴〵にするといふことは、一つの感覺を薄くする所以でないといふことをもかれは知つた。感覺を無數に分裂させても、その一の感覺を何うすることも出來ないものであるといふことをかれはやがて知つた。

祈る心と愛する心の間に、かれの苦痛は横つてゐた。愛することが何故わるいのだらう。愛する心と言ふことは、祈る心といふことゝ何故一致しないだらう。かれは愛する心がなければ祈る心もないものだといふことを考へずには居られなかつた。かれは廣い世の中を見渡した。愛しもせず、祈りもせずにゐる人が多かつた。

それが多數であつた。何故自己もさういふ人達と一緒になつて靜かにしてゐることは出來ないだらうか。

かれは馬車の窓から外を見た。

『もうぢきに違ひない』

かれはかう獨語した。畠と林とが路の傍にあつた。かれは御者にたづねた。

『もうぢきだらうね？』

『まだ、もうすこしあります』

『遠くから、その寺が見えるかね』

『いゝえ、見えませんね。その寺はごくひくい谷のやうなところにありますから』

馬車は軋つて行つた。

かれは病院に行く患者のやうであつた。『さうだ。病人だ。心の病人だ』かうかれは自分で言つた。悲しい哀愁がかれの心に簇つて集つて來た。

かれは遁れて來た都會の人達のことを考へた。はなやかに一生を送ることより他に何も考へてゐない國民のことがかれの頭に上つてゐた。French と Flemish との區別 German と Italian との區別などを考へてゐた。

馬車は丘のやうなところを通つて行つた。林が丘の緣を縫つてついていてゐた。薄い霧が被布のやうにかゝつて行つた。ふと路は丘

と丘との間から低い長い坂へとかゝつて行つた。林で蔽はれた大きな谷が前に開けた。

『寺が見えませう』

かう御者は指した。

成程、かれのゐる丘の上から、その大きな屋根が林のこんもりとした中に見えた。池のある庭園、森を帶びた牧場などもそれと指さゝれた。馬車はガタ〳〵と動いて行つた。暫くすると、そのシーンはまた林に遮へられて見えなくなつた。灌木の林で縁取られた。ヂックザックした路は、段々下へ〳〵と下りていつた。

遂に馬車は其の寺の前に來た。長い厚い灰色の塀がくるりとその周圍を圍んで、中央には、鐵で出來た大きな門がぴつしやりと

固く閉ぢられてあつた。四邊はしんとしてゐた。人の姿も見えなかつた。

『明日また迎ひに上りませうか』

かう御者が言つた。

『いや、いらない――』

『ぢや、お寺に長くゐらつしやるんですか』驚いたやうな顔をして御者は言つた。やがて歸つて行く馬車の姿が林の中の長い坂の上に見えてゐた。

かれは荷物を持つたまゝ其處に立つてゐた。かれの胸は烈しく波打つゝあつた。不知不解の世界、神祕の世界、不可思議の世界――そこに入る前には誰も感ずる躊躇をかれは強く烈しく感じ

た。Florence の顔が掠るやうにかれの眼の前を通つて行つた。

旅日記

一

東京から銚子に行く汽車の中で、私の下りて見たいと思ふ停車場が二つあつた。一つは四ツ街道驛で、一つは八街驛である。兩方ともさびしいつまらない處には相違ないのであるが、何故か私の興味を惹いた。

四ツ街道驛の停車場前にある旅館や小料理店や蕎麥屋や、町の通り裏にすぐ見える麥畑や、雨上りの泥濘深い路を拾ふやうにして

て歩いてゐる女や、さういふものが他の平凡な停車場に比べて、一種さびしい田舍らしい色を着けてゐたからである。私はロシアの田舍などのことを想像した。

一體、佐倉から成東まで出る間は、東京近所にこんな處があるかと思はれるほどさびしいさびしい山の中である。かなり深い山の中に入つても味はれないやうな氣のするほど世離れた山の中である。汽車は丘陵から丘陵へと通つて行つてゐる。松や灌木の多い處で、里らしいものは何處にも見當らない。何處に何うして人間が住んでゐるかと思はれる。かと言ふと、林の間からひよつくり路が出て來て、さうしてレールを横切つてまた林の中に入つて行つてゐる。崖の上に薪の組んだのが積んであつたりする。その

癖其處等に働いてゐる樵夫も百姓も見えない。藁葺の屋根もをり〳〵あるばかりで、それがまたさびしく崖に凭つたり林に添つたりしてゐる。

私は曾てK君と此處を通つた。其時K君は言つた。

『本當に山の中だ。何だか北海道でも旅行してゐるやうな氣がするよ。』

K君は北海道はよく知つてゐた。絶えず自然に胸をひらいてゐたK君には、かういふさびしい處が少なからず興味を惹くやうに見えた。K君はもうとうに死んで了つてゐる。私は今一人でそのさびしい山の中の汽車に乘つてゐる。

その時、K君は『かういふ處に何故人は別莊をつくらないだら

う。汽車の便はあるし、地面は安いし、木材はあるし、鎌倉や逗子なんかより何の位好いか知れやしない。其中拵へやうぢやないか、一軒』こんなことを言つたのを私は覺えてゐる。今でも私はさう思つて、その山の中を通つて行つた。

八街の停車場の忘れ難いのは、其時、丁度山櫻が盛りで、葉の中に白くチラチラ咲いてゐるさまが何とも言はれなかつたのも一原因であるが——それよりも、高原の上の一集落、ロシアのステップの中にでも見るやうな板葺藁葺の小さな家屋、深く泥濘の中に印された車の轍の跡、太古の民のやうにのそのそと歩いてゐる百姓の群　さういふものが私の頭に深い新しい印象を殘したのであつた。四街道、八街、その名が既にこの廣いさびしい丘陵地の

中の一中心點を示してゐるのも面白いと私は思つた。八街の停車場の前にはひろい茶畑があつて、丁度その時女が手拭をかぶつて茶を摘んでゐた。

八街から成東に出ると、丸で感じが違つて來て、何だか夜が明けたやうな氣がする。矢張、其處には人間の大勢ゐる町があるといふ風に私には思はれた。

二

干潟といふ停車場があつた。そこはもと海で、丁度、今の霞ケ浦のやうになつてゐて、椿湖といふ潟湖が深く入り込んでゐたといふことであつた。平忠常が叛したのは、其處に據つたのである。

その椿湖が今は椿村といふ名になつて、昔海岸であつた處に干潟といふ停車場が出來てゐるのは面白いなど思つて、私は汽車に乘つてゐた。

丁度其處等で日が暮れて、赤い月が東から昇つて出てゐた。それは光燈のない火の玉のやうな月であつた。後で支那大陸の黄砂のためであるといふことを新聞で知つたが、其時は何うしたんだらうなどと、私は不思議にした。松の多いところ沼池の多いところで、汽車がとまると、蛙の聲が湧くやうに聞えた。松の影は松の影に續いた。

銚子まで行く線路は、右、一二里の處に太平洋を豫想して行くことが出來るので、感じが平凡でなかつた。その南は例の鰯の取

れる九十九里の濱で、そこから大東岬、八幡岬の方に海と陸とはひろがつて行つてゐた。

波除不動のことなどが私の頭を往來した。弘法大師時分には、海に臨んだ徒崖の上にあつた不動堂が、今では二三里も山の中になつてゐた。年々陷落して行く北海のある地方と年々隆起して行く東海の海岸とが比較して考へられた。

汽車の中からをりを國道が見られた。そこには橋などがかゝつてゐたりした。それは二十年も前に、一度私が草鞋ばきで歩いて來た路だ。大網から銚子まで。中で八日市場の汚い旅館に私は筆商人と一緒に佗しい一夜を過した。その旅館は今あるであらうか。飯岡の停車場では、其時分通つた海岸の漁村をなつかしく思つて、窓から首を出して、月の明るい松原を眺めた。飯岡から酉明に行く間は、例の屏風ヶ浦の徒崖の上の高原で、私はその時其處を通りながら、丁度讀んでゐたメリーメの『カルメン』などを思ひ出してゐた。何だか西班牙の海近い高原のやうな氣がして歩いてゐた。私は今でもその時のことを忘れることが出來ない。

松岸の停車場は松の中にあつた。そこから少し行くと、利根の大河を隔てて常陸の大きな砂山が見える筈であるが、夜ではそれもわからない。唯、灯の多いのが町の近いのを私に知らせた。私はさびしい軌道に乘つて半島の絶角に行つて泊つた。

その旅から歸つたのは、夏のさかりのやうに暑い日であつた。妻は蚊帳を出して物干棹にかけて干してゐた。もう梅の實もかなり肥へてゐた。

霧島の躑躅は印象の明るい花である。綠葉と日光との反映がいかにも好かつた。私はまた旅を思つた。私はやがて剖葦のなく寺の一室に行つてゐた。剖葦のなく頃が一番好いと誰かが言つたが實際さうだ。あれを聞くと、旅の興が湧くやうに起つて來る。友達は私に言つた。『剖葦といふ鳥は面白い鳥だ。芦が一本でもあれば、水が少しでもたまつてゐれば、毎年忘れずにあゝやつてやつて來て鳴いてゐる。此間も、それが可哀相なので、わざと開墾した田の一部を殘して置いてやつた』

その寺には芍藥が見事に咲いてゐた。花うつき木のほの赤い花が本堂の廊下から微かに見えてゐた。さや豌豆、芥子、夏大根などが畠にあつた。友達の細君は、茄子の苗を一生懸命に畠に栽えてゐた。町には市が立つて、人がぞろぞろと通つてゐた。

私は三月の末に行つた松島の旅を思ひ出してゐた。終夜眠られずに輾轉反側した夜汽車の二等室、小說の材料にしやうと思つて下りて見た田舍町、さびしい神社、參詣者に油揚と玉子を勸める門前の茶店の婆さん、普請中の仙臺の停車場、乘替の間の時間を待つた岩切の停車場――其處から見た山の雪の美しかつたことを私は今も忘れずにゐた。

『あれは藏王岳ですな』

『さうです』

かう車中の人は言つた。

鹽竈から松島にわたる船は平凡な船路だ。今更めづらしく書き立てるほどのこともない。しかしその日はよく晴れてゐて、多門山の下から太洋にかけてのざわついた蒼い白い波に一帆の危く欹つて出て行くさまは、丸で繪か何ぞのやうであつた。大鷹森の赤く禿げた島の向ふからは汽船が入つて來てゐた。

いつも泊る旅籠屋が込んでゐたので、私は少し離れた家の三階の一間に行つて靜かに寢た。それは松島の全景を一目に見ると言つても好い位な眺望のすぐれた三階で、障子の硝子を透して、蒲團の中で寢ながら私はそれを全り見た。朝の眺望が堪らなく好か

つた。

瑞巖寺の中の岩窟は種々なことを私に思はせた。爐や居間や物置や押入や――さういふものが依然としてその跡を殘してゐるのも私にはめづらしかつた。島崎君の詩の中の『栗鼠と蒲萄』の木彫もなつかしかつた。觀瀾亭では、赤い帶揚をしたまだ世馴れない娘が、途切々々に桃山時代の話をして呉れた。秀吉と政宗、政宗と家康のことなどが考へられた。私は日の當る縁側に一時間はどゐた。

牡蠣の旨かつたことは、その旅での忘れられないものゝ一つであつた。あんな旨い、あんな大きな牡蠣を私はこれまでに見たことがなかつた。廣島の牡蠣でもあんなのはない。それは三つで一

升桝に一杯になるやうなものであつた。名物の寒竹の出る島に薄く夕日が當つてゐた。梅の花はやゝ白く咲きすぎてゐた。

仙臺の町を通つた日は、丁度大祭日で、町は一面に國旗で埋つてゐた。町には、私の遠い親類になる人達がゐたが、私はそれを訪問しやうともしなかつた。私の好きな俳句をよむ老人はもうとうに死んで了つてゐた。

脊梁山脈の大きいのは到る處で感じられるが、此處でも矢張その感が深かつた。羽前境の山はまだ皆な眞白で、美しく日にかゞやいて光つてゐた。私は青森から眞直に日本の中部を横斷して、日本アルプスのやうな高嶺を起して、そして段々中國の方に靡いて行く一大山脈を想像せずには居られなかつた。

歸途は海岸線に乘つた。松の多い處だ。こんなに松のある海岸は他にはあるまいと思はれる位だ。原釜で一晩靜かに寢た。平町の奥にある赤井岳は丸く黑く晴れた空に聳えてゐた。

四

朝鮮に二三年行つてゐた弟は久し振で細君を伴れて上京した。弟は伊川といふ處に一年近くも駐屯してゐた。『田舍だねえ、それはヒドイ田舍だ。しかし、滿洲よりは好いよ。兎に角、木があるし、川があるし、魚類なども多いよ。勿論、朝鮮の民家は駄目だがね。隊をつれて行つて、バラック生活をしてゐると面白いよ。おん大將だからね。何でも自由になるよ。昔の書生生活と少しも違

つたことはないんだからな。女もゐるよ。しかし、僕が行つてから、大に退治してやつたもんだから、後には一人もゐなくなつて了つたよ。さうだ、清正の行つた路だ。今でもあつちこつちに跡が殘つてゐるよ。清正と戰つて勝利を得たなどといふ石碑があちこちに殘つてゐるよ。それにしても豪いもんだ。あの時代に、輜重などの不完全な時代にあんな處まで出かけて行つたんだからな。さア、景色か、景色も好いところがある。豆滿江の上流には中々好いところがあるといふことだよ。ひとつ出かけて行つて見るんだね。龍山か。龍山は駄目だ。東京と同じだ。女もゐれば料理屋もある。あそこは内地以上だ。』

弟はこんなことを話した。御大喪に參列するために上京した弟は、その夜は遲く歸つて來て、庭から入つて來て、『おいおい、此處を明けて呉れ』などと言つた。気が立つと同時に私はまだ旅に出てゐた。

私は義兄と一緒に出かけた。義兄は『めつたに旅に出たことがないから二日ほど遊んで來たい』かうと言つて私を誘つた。行くところをあれかこれかと選んで見た。ふと私は川越行の新しい線が出來たことを思ひ出した。私達はそこに行つて見ることにした。

池袋から出て行く東上線の汽車の沿道は、一種違つたカラーを持つてゐた。私達は其處に唯麥畑と灌木の林と錯落とした人家とを見たばかりではあるけれども、しかも所謂往昔の武藏野に對する具象的な内容は、此の線路に由つて始めて明かに知ることが出

來ると思つた。中央線、中央線から岐れた川越線、殊に後者は武藏野を知るのに非常に便利ではあるけれど、それでも、この新しい線路がなかつたなら十分に武藏野といふものを頭の中に入れることが出來ないであらう。兎に角、この線路は、眞の意味に於て武藏野を横斷した線路であるといふことを私は信ずる。

池袋から川越まで一時間半は何うしてもかゝる。里程にしては六七里ある。そしてこの距離を直徑にした平野が即ち往昔の武藏野であるのである。

練馬、白子、大和田、志木などいふ停車場がその中にある。中央線と同じく眞直の線路で、到る處麥畑の中に新しい停車場の出來てゐるのも感じが好かつた。停車場には小さな霧島などが咲

いてゐた。

見ると、百姓らしい男や女が五六人停車場から出て行つてゐる。停車場の外には、今普請中の休茶店などがある。車が一二臺さびしさうに待つてゐる。路は麥畑の中を向ふの方へと出て行つてゐた。皆な汽車の出來たために新につくられたものだ。

『それ、汽車が來た！』

『汽車！』

さも汽車が珍らしいものであるかのやうに、畠道を急いで此方に走つて來る子供を私達は到る處で見た。ある林の陰の農家を掠めて通つて行く時には、娘や嚊が仕事の手を留めて長く長く見送つてゐた。東京から四五里の近い距離で、それで汽車がめづらし

いといふほどそれほどこの平野の民は開けずにゐたのであつた。秩父おろしの吹荒るゝ中に殆ど埋れるやうにして此處等の人達は暮してゐたのであつた。

武藏野の開けたのは、無論、德川氏以後である。その以前は、今、この線の通つてゐるところからかけて、所澤、田無あたりまで全く榛莽の裡に埋れてあつたのである。昔の人達は深谷、熊谷川越、久米、國分、府中の線を主として通過して、北國から關東へと出て來た。つまり武藏野の北端を東から西へと通つて行つてゐた。義貞の軍もさういふ風に出て行つた。上杉の軍は矢張同じやうに出て行つた。

志木といふ停車場がある。そこで下りて十二三町行くと、川に

臨んで志木の町がある。その向ふに荒川が流れて行つてゐる。

川越の町では、私達は靜かに落附いた鷹揚な氣分を感じた。町の小さな蕎麥屋で酒を飲んだりした私達は、郵便局の角から大通を五六町行つて引かへして、今度は細い裏道を通つた。そこには三味線の音などが聞えてゐた。

喜多院はちよつと靜かな好い處であつた。櫻の若葉の陰に若い女の蝙蝠傘が美しく日に光つて見えた。樹の暗く蔽ひかぶさつた池には、芦の新芽などが生えて、お玉杓子が水を黑くしてゐた。例の國寶の烏羽僧正の繪の繪葉書を賣つてゐる家などもあつた。

川越から大宮の方に出て來る電車は、沼の端を通つたり、荒川の鐵橋を渡つたりした。沼には芦や蒲の新芽が見事に茂つて、を

りからの午後の日影がキラキラと水の上にかゝやいてゐた。荒川の岸には、淡竹の藪が水の上に靡きわたつて、帆が一つ二つ通つて行つてゐた。

五

溶々とした利根川の畔の旅館の二階で目を覺した私達は、欄干に凭りかゝつて飽かずに朝川の流れを見てゐた。鯉のあらひに鯉こくに鰻の蒲燒――昨夜は遲くまで酒を飲んで私達は靜かに話した。

『好いねえ、何とも言はれない』

『東京の近所にかういふ處があらうとは思はれない。柴又よりも

二子よりももつと好い』

『また來るんだね』

私達は繰返して言つた。芍藥が前の庭の石の傍に美しく咲いてゐた。私達は川に添つた土藏の裏のやうなところを通つて、渡船場の方まで行つて見た。

十日前に利根川の河口を見た私は、今またかうしてこの上流に立つてゐるのであつた。此處から河口までは少くとも四十里はある。少し下流の關宿から汽船で行つても、銚子までは一日一晩かゝる。その間にある町や河港や松原や鐵橋や、さういふものが一つ一つ私の眼の前に蘇つて見えて來る。小利根と大利根とを連絡せしめた運河の朝の靜けさなども思ひ出されて來た。

『もう、あの鐵橋は架換へなくつてはいけないんですつてね』

女中のかういふのにつれて、私の少年の頃の記臆が漲るやうに私の胸に簇つて來た。私は十九の時に、一家族を擧げてこの河舟で、東京に移轉して行つた。私は『朝』といふ短篇を書たことを思ひ出した。『さうですか、その時分始めて出來た橋がそのまゝになつてゐるんですか。それぢやもう餘程古い』

義兄はこんなことを言つて笑つた。私の眼の前には、船頭に賴んで舟を態々その鐵橋の下に寄せて貰つて、その大きな橋柱を闇の中に撫でゝゐる十九歳の少年が歷々と見えてゐた。

私達は其日の十時頃まで其處にゐた。歸りは、前に書いた寺に一晩泊つた。座敷の養蠶は既に三眠を過ぎてゐた。

東京では、やがて月が變つて、その初旬から梅雨の季節に入つて行つた。初の日からじめじめした雨模樣なので、『現金なものだね。梅雨に入つた日にはちやんと雨が降る』などと人々は言つた。庭の綠もあまりに濃やかになりすぎて、却つて窓が暗いやうになつた。朝、行つて見ると、梅の實が澤山に庭に落ちてゐた。

梅雨に入つてから三日か四日目の朝に、烈しい雷雨があつた。妻は慌てゝ電氣のもとの栓を外したりした。簾をつくやうな雨は軒のトタンの樋から瀧津瀨のやうに落ちた。井戸端の向ふには白い杜若が雨にぬれて咲いてゐた。

肴屋の半切の中には、生きたこちだの鰈だのがあつた。今年は鰹が少く、仙臺鮪などが多かつた。肴屋はあらひをつくるために

洗桶の中にめざるを入れて、釣瓶を井戸側に寄せかけて瀧のやうにして何杯も水を落した。垣の傍には、青紫蘇や蓼が裁へられてあつて、それを妻は冷豆腐のやく味などにした。夜はもう蚊が著しく多くなつてゐた。私は六疊の書齋に蚊帳を釣つて、電氣ランプをその中に入れて、青い濃やかな影の下で夜おそくまで小説を書いた。

ある中年の女は、上方の旅から歸つて來て、高野山の話だの和歌の浦の話だのをした。曾て行つた光景が一つ一つ私の眼の前に蘇へつて來た。高野山では、今、鶯と子規がかけ合ひで鳴いてゐるといふ。和歌の浦では、天狗山にエレベイターが出來て、十錢出してそれに乘つて見たといふ。宇治では、縣祭で、停車場が

一杯であつたといふ。私は紺蛇の目の傘の通る宇治橋の光景などを想像した。

甲州の山の中の溫泉場から歸つて來た友達は、其處で靜かに一週間仕事をして來た話をした。そして、『今年は何處へもお出でになりませんか』などと訊いた。私の旅の興はまた動いてゐた。私は其處か此處かと考へて見た。夏は蚤や蚊のゐない山の中が一番好いのであるが、餘り度々行つたので私は日光の山水には飽きて來てゐた。『何處か海岸に、好い處がないでせうか』かう言つて見たが、近い處では、行つて見たいと思ふやうなところもなかつた。今度行くなら、もう少し遠い旅をして見たいと私は思つた。出雲隱岐の海岸だの、北國の海岸だの、陸奥の下北半島だのが頭に浮

んで通つて行つた。梅雨は降つたり晴れたりしてゐた。何うかすると、明るい日影が庭の緑葉に漲り渡つて、鼠色の雲の間から碧い空が聰しげに覗いた。私は旅を思つてゐた。

僧房にわかるゝさて

あと二三日で、私はこの僧房を去らうとしてゐる。私が去つて了ふと、門も、入口の雨戸もぴつしやりと閉つて、家は再び鼠の巣と黴の匂ひとになつて了ふのであらう。そして、誰かあとの人が入つて來るまでは、圍爐裏の上の鐵瓶も、机の前の座蒲團も、棚の上の貧乏德利も、私の置いたまゝになつて何年も何年も殘つてゐるだらう。私が始めてこの僧房に入つて來た時、到る處に私の前に住んでゐた人の痕跡を發見した。戸棚を明けると、醤油が殘つてゐた。砂糖が殘つてゐた。茶が殘つてゐた。罐の中の豆には蟲がついて、蓋を取ると、ワンと言つて氣味のわるいやうに飛び出した。

『もう四年になりますからね』かうその時主僧が言つた。

私は私のあとに入つて來る人のことなどを想像した。

痕跡といふことに就いて私は考へた。人間の殘した跡――それは意味の深いことだ。と、私の頭には含滿の淵の岸にある地藏さまのことなどが浮んで來た。獨歩と一緒に散歩した時『この地藏・

さんは人間の跡だね。かういふものを人間がつくつて殘して行くツていふことが意味があるね。この地藏さんの像は石で刻んだものだとは思はれないね。人間がかうした形をつくつて殘して行くといふ心持が面白いぢやないか』かう獨歩が私に言つた。私はそれを思ひ出した。

私は來た當座、一緒に來た書生に話した。『痕といふものは書けるね。殘つてゐた物の形で前に住んだ人のことを想像するといふのは面白いことだね。一つ書くかね』こんなことを私は言つた。書生はまた書生で、押入の中から、女のする船底枕などをさがし出して、『先生、先生、こんなものがありましたせ。お寺にかういふ枕のあるのはちと變ですね。』さも大事を發見したやうな顏をし

て言つたりした、何かめづらしいものはないか、何か前住んでゐた人の秘密をかぎつけるやうなものはないか。かう思つて私達は埃の一杯にたまつてゐる戸棚だの押入だのを明けた。

『私の後に來る人も、矢張さうしてあちこちをさがして見るだらう』私はかう思つてさびしい氣がした。

私の僧房には、さまざまな人が來た。そしてその度毎に、いろ〳〵な心が動いて、いろ〳〵な言葉が交されて、そしてまたもとの寂寞へと歸つて行つた。もとの寂寞――こればかりは何うすることも出來ないものだ。

ある人は私の僧房で、生活の方法を變へようとした。ある人は

靜かに疲勞をやすめようとした。ある人は、『もう東京に歸るのはイヤだ。いつまでもかうしてゐたい』と言つた。私をこの僧房にたづねて來た故郷の妓も、短かい滯在の間にいろんな困難に出會して、十日ほど前に暇乞に來て、そして國の方へと歸つて行つた。何も彼も過ぎ去つて行つた。元の寂寞が後を領した。

私の心の上にもいろ〳〵な變遷があつた。私は私の半生を靜かに振返つて見るやうな人であつた。烈しく進んで行つた私、何も彼も構はずに進んで行つた私、四面の壁に突當るのも知らずに驀地に出て行つた私――それを私は離れて見ることが出來た。個人と社會といふことなどを深く考へた。私は開かれない扉に向つて立つてゐる人であるといふことをつく〳〵感じた。私はさういふ

心持の中で、Huysmane の "En. Rout" を讀んだ。Flaubertの "Bonvard and Peuchet" を讀んだ。テカダンのかげにあるシンボルといふことなどを考へた。

私は好んで老いた人と話をした。八十三になる婆さんと圍爐裏の前で長い間話しをしたりした。年を老つた僧は、私の爲めに長い昔話などをして聞かせた。

しかし、私は矢張都會の色彩を忘れることが出來なかつた。私は新聞すら讀まないやうにしてゐたが、それでも都會の色彩と響とは、絶えず私の胸を躍らせた。心の消長、心の盛衰、心の躍進、それにはいつも私は征服されてゐた。

加行の徒にならうと志したことも一度や二度ではなかつた。

しかし、その加行の徒が矢張惡魔の障碍を防ぐことが出來ないのを見て、私はいつもその願ひから後に戻つた。『流轉か？　躍進か？　それ以外に、ライフの眞相はない』かう私は思つたりした。

私の寺の門を出て、輪王寺の傍を通つて、そして東照宮の正門に行く間を、私は午後四時過によく歩いた。其時分には、其處を誰も通つてゐなかつた。大きな杉の間の路がしんとしてゐた。私は其處でよく過ぎて行くライフを頭に浮べた。

私はさびしくなると、いつも輪王寺の方へと出かけて行つた。大きな門を入つて、三佛堂の扉の固く閉つたのを左に見て、そして黑い板塀の處に行つた。そこにある木戸を明けると高く四邊に音を立てた。其處に私の友達の和尙さんがゐた。

『ゐますか』

かう言つて私は上つて行つた。

『もう何うしても歸りますか……。もう少しゐたら好いでせう。まだ、今月一杯はそんなに寒くなりませんから』

『でも隨分長くなりますからな』

『五月でしたね』

『……だから、もうかれ是半年ゐるんですよ。大變御世話になりました。』

『それでもちつとは何か出來ましたか』

『思つたほど出來ませんけれど、いろ〳〵なことを考へましたよ。

それだけでも此處に來てゐた甲斐はあると思ひますね』

『もう少しゐらつしやい……この下旬には、立木の觀音堂の入佛供養があつて、中禪寺が賑やかですから』

かう和尚さんはとめて呉れた。

馴れた空氣に離れて行くのは、何となくさびしいものだ。僧房に馴れた私は、僧房をたづねて來る人々にも馴れた。御用聞の商人達とも懇意になつた。中禪寺のつた屋の主人からは、お客をつれて私が度々行つたので、大きなますを苞に入れて、熊笹で包んで、そしてわざ〳〵送つてよこして呉れたりした。毎日煙草や繪葉書を買ひに行く店の頰の赤い上さん、髪を綺麗にわけた番頭さん、東京の橋場から來てゐるといふ元氣な豆腐屋の小僧さん、八

百屋の子息、蕎麥屋の若い衆――さういふ人達とわかれて行くのも何となく物さびしかつた。

神橋の傍の雜貨店にゐる娘は此頃姿が見えないが、何うかしたんぢやないかなどゝ私は思つた。それはお伊勢さんと呼ばれてゐた。痩せた、細つそりした娘で感じの常に變つて見える人であつた。『あの娘は時によると非常に綺麗に見える時があるよ。さうかと思ふとそれほどでもないと思はれる時もあるがね。矢張、氣分の始終變つてゐるやうな氣質の娘だね。何處か複雜した心を持つてゐて、始終動いてゐるんだね』などゝ私達は評判した。夏の夕方などには、派手な中形に黑繻子の帶なんかをしめて、薄くお化粧をして、店の前に立つてゐたりした。『まア……』なんと言つて

笑つて奥の方から立つて來たりした。私が歸つて行つたあとでも、そのお伊勢さんは、矢張、さびしさうに白い弱弱しい顏を見せて店に坐つてゐるのであらう。紅葉の客もやがては來なくなつて、雪がこの町を白くするであらう。かう思ふと、私は一層さびしい心持がした。

五六日前には、東京から大勢客が來た。そして一緒に伴れ立つて、中禪寺から湯元の方へ出かけた。

來た日は曇つてゐたが、其翌日は一點の雲もないといふやうな晴れた日であつた。僧房に半年ゐた紀念として、今日は大いに遊ばう。かう私は思つた。東京から來た頭の丸い人の背には、三味線が一挺、風呂敷に包まれて負はれてゐた。『これをかついで、山の上まで行くやうな特志なお客さんは、滅多にないだらうね』などゝ私達は言つて笑つた。一行の中には、小唄の上手な姐さんと無邪氣な女學生とが雜つてゐた。

私達は明るい湖水を前にした室で、早くも三味線の棹をつないだ。冴えた撥の音は靜かな空氣の中に際立つて鮮かに響いて聞えた。實際明るい感じがした。紅葉に照つた日影は、鏡のやうに澄んで湖水の周圍を取卷いてゐた。

『見てる、見てる』

かう誰かゝ言つたので、後を振返ると、隣の普請場にゐた大工達は、めづらしいので、手をとゝめて此方を見てゐた。家の女中

達も驚いたやうな顔をして、廊下に來て私達の唄つたり躍つたりするのを見てゐた。

私達のゐる三階の欄干からは、湖水の岸にある雁木がすぐ下に見えた。大きなスワンが一羽綺麗な碧い水に浮んで泳いでゐた。雁木のところには、傳馬が一隻つないであつて、赤いメリンスの座蒲團が五つ六つそこに置いてあつた。いつでも漕ぎ出せるやうに、櫓がもうちやんとつけてあつた。『あれで行くんだね』友達の一人はかう言つて樂しさうに私の方を見た。

麥酒に菓物に煙草盆を乘せた船！『中禪寺の湖水で一つ大に三味線を鳴らすんだね』かう言つて私達はやつて來たのだ。やがて三味線の音は流るゝやうに湖水に響いて聞えた。

菖蒲ヶ濱では、中禪寺で頼んで置いた馬車がもう先に行つて待つてゐた。その黑い馬車は船がまだ岸につかない中から見えてゐた。『もう、馬車が來てるぜ』かう言つて私達は笑つた。

友達の一人はわざと頰被をして、御者臺に上つて、老いた御者と並んで腰をかけた。喇叭を鳴して見たりした。瀑のある或る谷川の淺瀨では、そこに泳いでゐるますを見附けて、それを捕らうとして、私達はざぶざぶその中に入つて行つたりした。戰場が原は時の間に過ぎた。

湯瀑の上のところに行つた時には、もう日が全く暮れてゐた。奥の奥の靜かな温泉場、湖水を隔てゝ灯のチラ〳〵する温泉場—

—その奥にある旅館の二階の一間は其夜、何んな賑やかな光景を

呈したであらう。十年以來の流行唄といふ流行唄は皆な其處で唄はれた。清元も出れば、常磐津も出る。小唄も出れば、奈良丸くづしも出る。後にはカッポレから手品まで出た。それに引よせられて客と言はず女中と言はず主人主婦と言はず、家にゐるすべての人達は皆な廊下に來てすらりと並んでそれを見てゐた。賑やかな一夜であつた。

あくる朝は宿の船で送られて、靜かな湖水の上を湯瀑の落口まで來た。そこでも私達は冴えた三味線の音の朝の空氣に漂ふのを聞いた。絃聲和艫聲——何とも言はれない靜かな靜かな氣分であつた。

湖畔で折つて來た八汐の紅葉の大きな枝は、筧の大きな桶に一杯になつて挿されてあつた。筧の水はその紅葉の下からちよろちよろと小さな音を立てゝ落ちてゐた。昨日はそれに雨が降りかゝつて、一層鮮かな色を見せた。

『しかし、もうお別れだ』

私は半年の僧房生活を振返つて見た。さらば、山よ、水よ、筧よ……。

泉　終

大正五年五月二十二日印刷
大正五年五月二十七日發行

定價金五拾錢

名家近作叢書
（第一輯）

著者　田山花袋

發行者　東京市本郷區本郷一丁目九番地　板谷吉太郎

印刷者　東京市京橋區南鍛冶町五番地　牧口駒三郎

發行所　東京市本郷區本郷一丁目大通　日東堂
電話下谷四三六二番
振替東京一二五五八

三和堂印刷所印刷

日東堂出版圖書大賣捌所

所在地	店名
東京市神田區表神保町	東京堂
東京市神田區裏神保町	上田屋
東京市神田區錦町	誠文堂
東京市神田區錦町	勉强堂
東京市神田區錦町	京華堂
東京市神田區錦町	盛文館
東京市神田區錦町二丁目	益文堂
東京市神田區錦町一丁目	奎運堂
東京市日本橋區本石町	至誠堂
東京市日本橋區大傳馬町二丁目	文林堂
東京市日本橋區數寄屋町	六合館
東京市京橋區南傳馬町一丁目	目黑分店
東京市京橋區出雲町	新橋堂
東京市京橋區銀座尾張町	東海堂
東京市京橋區元數寄屋町	北隆館
東京市京橋區銀座四丁目	春祥堂
東京市本鄉區元富士町	盛春堂
東京市本鄉區元富士町	日本堂
東京市小石川區原町	鷄聲堂
横濱市伊勢佐木町	勉强堂
甲府市柳町二丁目	大塚柳正堂
名古屋市西區玉屋町一丁目	百架堂

所在地	店名
名古屋市西區本町三丁目	川瀬書店
長野縣松本市大名町	鶴林堂
大阪市東區北久寶寺町四丁目	福音社
大阪市東區瓦町四丁目六〇	盛文館
大阪市東區淡路町四丁目二四	登美屋
京都市佛光寺烏丸	東枝書店
金澤市片町	宇都宮書店
福井市佐佳中町	中村興文堂
新潟市古町通六	萬松堂
岡山市西大寺町	大森隆文堂
山口縣山口町中市	白銀日新堂
久留米市米屋町	菊竹金文堂
仙臺市大町五丁目二一五	鈴木英華堂
仙臺市大町四丁目	金港堂
青森縣弘前市土手町三十番地	今泉書店
米澤市立町五	盛文堂
札幌區南一條西三丁目	富貴堂
小樽區稻穗町大通	勉强堂
鹿兒島縣中町	谷村書店
大分縣大分市本町	忠文堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房
朝鮮釜山府大倉町	博文堂
大連大山通一丁目	大阪屋號

終